

氏名（国籍）	宮 琳（中国）
学位の種類	博士（人間科学）
学位記番号	博甲第57号
学位授与年月日	平成30年9月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	中国大学日本語専攻教育における文学を用いた 第二言語（日本語）教育方法論の構築 —読者反応理論をもとに—
論文審査委員	主査 東亜大学大学院 教授 家根橋 伸子 副査 東亜大学大学院 教授 鶴澤 和宏 副査 東亜大学大学院 講師 麻生 迪子

論文内容の要旨

1. 研究の背景と動機

中国の日本語教育では、大学日本語専攻教育がその牽引役的存在となっている。日本語専攻教育では、現在、実用的教育、技能訓練的教育が重視されており、人文教育の比重が軽くなっている（胡等、2006）。しかし、近年、行き過ぎた実用重視から、中国大学日本語専攻教育においては、専攻学生の論理的思考能力、巨視的思考能力、問題分析能力、人文教養の基礎の欠如などが問題として指摘されている。このような状況を背景に、現在、大学専攻日本語教育においては、学校教育の一環として人間育成を目標においた教育が求められるようになってきた。本研究では、人間教育としての大学日本語専攻教育の手法として文学の有効性に着目し、文学理論、中でも読者反応理論に基づく第二言語（日本語）教育方法論の構築を目指した。

2. 本研究の目的

読者反応理論に基づく、日本語習得とともに人間育成を目指す文学を用いた第二言語（日本語）教育方法論の構築を行う。

3. 本研究の構成及び各章の概要

本研究では、前項の目的のもとに、まず第I部で、中国の大学教育に適した方法論を構築す

の上での前提となる、中国の大学日本語教育及びそこにおける文学の位置づけの変遷と現状について、国家の教育政策・方針、教育の主軸である教科書、教師の意識調査から明らかにした。第Ⅰ部での結果を踏まえ、本研究の中心となる第Ⅱ部では方法論の構築を行った。まず、先行研究・理論研究から、第二言語教育における文学の有効性、文学を用いた第二言語教育方法、言語教育に応用可能な文学理論について検討した。続いて、文学理論から本研究では読者反応理論に注目し、これに基づく方法論の理論構築を行った。さらに、構築した方法論を実験授業を通し検討を行い、最終的な方法論の確立を行った。以下、各章について述べる。

第1章 中国日本語教育史と政策における文学の位置づけ

公文書・教育大綱の分析により、中国政府の日本語教育（外国語教育）に対する教育政策・方針の変遷と現状、及び教育政策・方針における文学の位置づけを明らかにした。分析の結果、中国の大学外国語教育、またそこにおける文学の位置づけは、社会情勢と国家の政策によって絶えず変化していることが示された。現在の中国の大学外国語教育においては、異文化理解、人文教育重視の方針が打ち出されていた。また、教材における文学については、基礎言語技能育成のための教材として位置づけられていることが明らかになった。

第2章 大学日本語専攻精読教科書の変遷及び精読教科書における文学

第2章では、日本語精読教科書掲載作品選定の特徴と変遷を明らかにすること、掲載文学作品の題材の特徴を明らかにすることを目的に教科書分析を行った。さらに分析結果を教科書編纂に関する公文書と照合し、中国日本語教育における文学の位置づけを探索した。その結果から、教科書における文学作品の位置づけは当時の社会状況及び政策によって変化しており、現行教科書では、文学は①高学年段階では文学重視の傾向が強く、特に「評論・エッセイ・随筆」が中心であるが、2000年代後半以降は「小説・物語」を重視する傾向が見られること、また、②大学により出版教科書掲載作品のジャンル、題材が異なることが明らかになった。

第3章 中国の日本語教師による文学の位置づけと教育方法

第3章では、中国大学中国人日本語教師の意識から中国日本語教育における文学の位置づけを探った。教師の文学に対する意識を明らかにするため、文献調査及び中国大学在籍日本語教師に対し、文学の扱い方等を問うアンケート及びインタビュー調査を行った。調査結果の分析から、教育現場における文学の使用については、基礎段階では、言語知識の伝授が重視され、文学も言語知識の素材として用いられていた。高学年段階においては、多くの教師によって文学の重要性が主張されていたにもかかわらず、学生の言語力・理解力への不安から、高学年段階でも基礎段階と同様に教師主導で言語知識習得を重視した授業が多く行われていることが明らかになった。

教育方法については、多くの教師が学習者の主体性の重要性を認識しながら、授業時間の制約、授業評価、試験を重視する教師・学習者双方の意識等の要因で、教師主導の授業が行

われていた。一部の教師は、学習者の主体性を活かす教え方を試みていたが、個々の教師の恣意的な教え方にとどまり、理論に基づくものではなかった。教材である文学作品の理解においては、学習者個人の解釈より作者の意図を重視し、著名な学者や教師等の権威者の考えを用い、学習者の理解を導いていくことが目的とされていた。一方、少数ではあるが、文学理論を用いる教師もいた。しかし、言語教育より文学教育に主眼をおくものであった。

第Ⅰ部のまとめとして、中国大学日本語教育では文学が重要な位置を占めているが、文学を用いた言語教育について具体的な教育理論が構築されていないことが課題として提示された。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で指摘した課題を踏まえ、読者反応理論に基づく文学を用いた第二言語（日本語）教育方法論の構築を行った。

第4章 第二言語教育としての文学教育と読者反応理論

第4章では、先行研究・理論研究より(1)第二言語教育における文学の有効性、(2)第二言語教育及び言語教育に応用される諸文学理論の検討を行った。さらに、(3)文学理論の検討から最も有効性が期待された読者反応理論とその中国日本語教育への応用の可能性を検討した。

(1)第二言語教育における文学の有効性については、先行研究から言語知識習得、言語技能向上、文化知識、分析能力を培うこと、学習動機の促進、人間性の育成等に有益であることが報告された。

(2)第二言語教育及び言語教育に応用される文学理論については、第二言語教育以外の文学教育、国語教育におけるものも含め、諸文学理論とそれに基づく教育理論・教育方法論に関する先行研究を検討した結果、読者反応理論が最も有効な理論として考えられた。したがって、本研究では、読者反応理論を本研究における教育方法論の基軸理論として採用することとした。

(3)読者反応理論と中国日本語教育への応用の可能性については、まず、読者反応理論について言語教育の観点から検討し、中国日本語教育における理論上の有効性を提示した。

読者反応理論とは、「読者が自らの経験に基づいてテキストの意味を作り出す方法に関心を寄せる」様々な理論の総称(Beach, 1993, p. 1)である。読者反応理論は、自己・他者(世界)認識の更新を通じた読者(学習者)の人的成長を目指す理論であるとされ、教育に応用されている。読者反応理論に基づく言語教育論は、学習者(=読者)の主体性、能動性を強調し、作品を読むことを通し言語習得と読者(学習者)の人的成長の双方を目的とする教育理論である。

第5章 中国大学日本語教育における読者反応理論に基づく文学を用いた第二言語（日本語）教育方法論の理論構築

第5章では、読者反応理論に基づく第二言語（日本語）教育方法論の理論構築を行った。Richards & Rodgers(2004)の枠組を応用し、各構成要素(言語論、言語学習論、文学教育論、目的、シラバス、教室活動、学習者の役割、教師の役割、教材の選定、手順(procedure)・授業構

成) について、読者反応理論をもとに特定した。特定にあたっては、読者反応理論を応用した第二言語教育の先行研究が少なかったため、中国大学における第二言語教育であることを考慮に入れつつ、応用の進んでいる日本の国語教育の応用研究を主に参照した。

第6章 第二言語教育における読者反応理論に基づく文学作品を用いた第二言語（日本語）教育方法論の検討

第6章では、第5章で構築した方法論を実験授業によりその有効性を検討した。手順として①実験授業のデザイン、②実践授業の実施、③授業分析を経て④方法論の有効性の検討を行った。

実験授業は、中国大学日本語専攻の3年生7名を対象に、宮沢賢治『注文の多い料理店』を教材として用い、本研究が教師として120分の授業をデザイン、実施した。収集したデータ（reading log、授業録画及びその文字化データ、感想文等学習者提出物、実践後インタビューの録音及びその文字化資料）を、個々の学習者の読みの深さ、深まりの過程、深まりの要因を焦点とし、ランガー（1990、2000）の4つのスタンスをもとに分析を行った。

実験授業分析の結果、構築した方法論に基づく授業を通して学習者の読みの深まりが見られ、本教育方法論が学習者の読みの深まり、文章理解（言語理解）の向上、及び自己内省を通じた人間的成長に有効であることが確認された。また、方法論の各要素の検討を行った結果、以下の点が指摘された。

- ①文学テキストの特質である「不確定箇所」（「空所」、「否定可能箇所」）は、学習者のテキストの意味構築を誘導する。
- ②読みのストラテジーを促進する手法（procedure）として方法論に採用したreading logは、学習者のテキスト全体の理解に効果的である。また、reading logは教師が学習者のテキスト理解を把握するうえでも有効である。
- ③読みにおける他者との相互作用を促すために、方法論の教室活動にペアワーク、グループワークを取り入れたが、このことは学習者がテキストに内包されるより深い意味を読み解くことに有効に機能した。
- ④教師の役割である問いかけ、方略、作品構造分析は、学習者の深い読みを支援する重要な機能を持つ。

第7章 結論

第7章では、第Ⅰ部と第Ⅱ部を総合し考察を行い、本研究の結論を示した。

第Ⅰ部から、中国大学日本語教育では、実践重視への反省として、言語教育を通じた人間教育の重要性が提唱され、それを促進する教材として文学が注目されているが、具体的な教育方法論が提示されていないことが課題として提示された。特に、学習者の能動性、主体性を重視する教育方法論の必要性が課題としてあげられた。第Ⅱ部ではこの課題を踏まえ、読者反応理論に基づく文学作品を応用した第二言語（日本語）教育方法論の理論構築を行い、実験授業

を通して、方法論の有効性を確認した。本研究で構築した方法論は読みの深まりを通して、文章理解（言語理解）、人間的成長に有効であることが示された。ただし、本研究の限界として、方法論の検証方法が同一グループによる実験授業に限られており、今後はより多くの実験授業による検証を重ねるとともに量的な研究方法も取り入れていく必要がある。さらに、他の言語の教育にも有効であるかどうか、また、中国の大学以外の言語教育機関・外国語教育機関、中国以外の言語教育機関での有効性についても検討していく必要がある。

本研究の意義として、以下の点があげられる。

- (1) 読者反応理論を中国の日本語教育に応用し、新たな教育方法論を構築した。
- (2) 従来の第二言語教育の枠組みを広げ、文学教育、第二言語教育、人間教育を融合する研究である。

論文審査の結果の要旨

宮琳氏による学位審査請求論文に対する本審査会を、上記の審査員の内2名及びオブザーバーとして東亜大学大学院総合学術研究科人間科学専攻主任・古川智教授にご出席いただき、平成30年8月18日11:00～12:00に開催した（副査の鶴澤教授は欠席となったため、書面による論文審査コメント、質問事項を事前に受け取り、主査が代行し口頭試問を行った）。冒頭約30分で論文要旨の説明を宮琳氏が行い、その後に論文内容についての質疑応答を約30分間行った。論文審査員から複数の質問がなされ、それらに対する回答が宮琳氏からなされた。回答はいずれも適切なものであった。その後、合否判定を審査委員間で行った結果、審査委員会として「合格」の判定を下した。同日13:15に開催された公聴会において発表が行われ、公聴会参加者から複数の質問がなされ、それらに対して適切な回答が宮琳氏からなされた。公聴会終了後、合否の議論を専攻教員間で行った結果、人間科学専攻の総意をして「合格」の判定を下した。なお審査会の際に、審査委員会から主要用語の定義が不十分であること、第3章の質問紙調査の信頼性についての疑義、日本語の不備が指摘されたが、その後修正がなされ、適切に修正されていることを審査委員会として確認した。

主たる審査会の内容は以下の通りである。

1. 本論文は、中国大学日本語専攻教育における言語教育の最終的な目的を人間教育に置いたうえで、その方法として文学教材の有効性に着目し、文学教材を用いた第二言語（日本語）教育方法論の構築を行ったものである。論文として十分な内容と適切な論考構成を持つものであるが、各論考の緻密さという点で若干の粗さが見られる。特に、第3章での中国人日本語教師の文学使用についての質問紙調査において、その信頼性と妥当性が確保

できていない。構築された教育方法論の検証も、本論文で一定の確認はなされているものの、今後より対象を広げ検証していく必要がある。人間教育、文学教育など、本論考の要となる用語の定義があいまいである点についても明確化が求められる。

2. 第二言語教育の目的に人間教育をおくことについて、それが日本語教育分野においてどの程度受容・共有されている考え方であるのかについて質問がなされた。本研究は大学日本語専攻教育を対象としたものであり、学校教育の一環として位置づけられる。したがって、学生の人間性育成はすべての教科においてその目的としておかれる必要がある。第二言語教育における人間教育の方法として文学理論（読者反応理論）を基盤とする教育理論は、これまでの日本語教育では着想されてこなかったものであり、本研究の独自性にもつながっている。しかしながら、第二言語教育研究という視点から、第二言語教育分野での一般的な「読解」と本研究での読者反応理論に基づく「読み」の違いが論述からは明確でない。この点を明確にすることで、第二言語教育方法論としてより受け入れられやすい理論となっていくことが期待される。

3. 本研究は、著者にとって外国語である日本語で執筆されているため、日本語表現の誤り・不十分さが散見される。これらの日本語表現上のミスは本論文の博士論文としての資質を損なうものではないが、提出にあたっては必要な日本語の修正が求められる。

付記

審査会にて審査委員から指摘された上記の点について、その後修正がなされ、提出論文において適切に修正されていることを審査委員会として確認した。